

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^{みのしろきん} モナ・リザの身代金

昭和 58 年 4 月 25 日

初版 1 刷発行

定価680円

著 者 ^み三 ^{よし}好 ^{とおる}徹

発 行 者 大 坪 昌 夫

印 刷 者 盛 庄 吉

東京都文京区水道2-4-26

慶昌堂印刷

発 行 所

東京都文京区音羽 2
振替 東京 6-115347

株式
会社
電話

光 文 社
東京 (942) 2 2 4 1(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Tōru Miyosi 1983

ISBN4-334-02499-8

Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

モナ・リザの^{みの}身^{しろ}代^{きん}金

^み三^{よし}好 ^{とおる}徹

長編推理小説



カッパ・ノベルス

モナ・リザの身代金 みのしろぎん 目次

第一章	「モナ・リザ」の唄 うた	5
第二章	「モナ・リザ」と醜聞 スキャンダル	30
第三章	「モナ・リザ」の謎 なぞ	56
第四章	「モナ・リザ」消ゆ	83
第五章	「モナ・リザ」の値段	109
第六章	「モナ・リザ」の代償	145
第七章	「モナ・リザ」は何処 いすこ	169
第八章	「モナ・リザ」よ、さらば	193
解説………	権田萬治 ごんだまんじ	225

イラストレーション

辰^{たち}
巳^み
四^し
郎^{ろう}

第一章 「モナ・リザ」の唄^{うた}

1

三カ月前まで、津村路子^{つむらみちこ}は自分がそのような行為をするようになるとは、夢にも思っていなかった。建太郎^{けんたろう}との間に生まれた辰夫^{たつお}が満一歳の誕生日を迎えた夜、建太郎は辰夫をひざの上にのせて、

「早いものだなア、もうお誕生日か」

と目を細めるようにしていったのだ。

路子は、尾頭^{おかしら}つきの料理と、ローソクを点^{とも}したケーキを用意していた。シャンペンも買ってあった。

「いい子ちゃんね。さア、吹き消すのよ」

と路子は辰夫にいったが、もちろん辰夫にそれが理解できるはずもない。辰夫は、まだ言葉にならない声を出すだけだったが、それでも機嫌よく、建太郎のひざの上で小さな手をしきりに叩いていた。

「じゃ、パパとママといっしょに消しましょうね」

路子はそういって、建太郎のわきに座った。三人で炎に口を寄せて吹き消すつもりだった。

だが、建太郎は辰夫を路子に渡した。

「あら」

思わず路子は小さく叫んだ。建太郎は何もいわなかった。路子としては、建太郎の腕の中に辰夫を抱いたまま、炎を吹き消してもらいたかった。辰夫の置かれている境遇やこれからさきの人生のきびしさを考えると、せめて初めての誕生祝いのときくらいは、そうしてもらいたかった。

辰夫が成長してからは、そういうことはできなくなるだろう。建太郎には、妻子がいるのだ。

小野田建太郎は、国際建業の専務取締役である。国際

建業は、年商が一兆円をこえる大手の建設会社の一つで、建太郎の父親の貫次かんじが社長をつとめている。だから、建太郎がやがては社長になることは間違いない。そして、その建太郎のあとは、彼の長男が継ぐようになるだろう。彼は、名門の高小路家たかこうじから迎えた妻との間に、二男一女をもうけていた。

辰夫を身ごもったとき、建太郎は、何もいわなかった。路子は、中絶しろよ、といわれるものと覚悟していた。

そのときは、どうするか。

「あなたにはご迷惑をかけることはしません。わたしの手で育てますから」

というつもりだった。

じっさい路子はその決心だった。建太郎が出産に反対しても、中絶する気持ちにはなかった。あるいは、建太郎は、別れる、というかもしれない。そうなることを望むわけではないが、かりに最悪の事態になったとしても、胎内の生命の芽をつみ取ることはできない、と自分にいい聞かせていた。

だが、建太郎は、路子の妊娠を知っても、どうしろと

はいわなかった。一方、路子のほうも、自分のほうから、生みますといわなかった。生む決心はしていたが、そのことを話題にして、建太郎に、中絶しろといわれるのがこわかった。彼女がいかに迷惑をかけないからといっても、建太郎が、それなら生んでもいい、と承知するはずはない、と路子は考えていた。そうなれば、どちらにしても、気まずいことになる。

本当は、気まずいことになったとしても、はっきりと決着をつけておくべきだったのだ。生まれる子の籍はどうするか、養育費はどうなるのか、そのほか、いろいろな問題が生じてくる。男女の仲で、そういうことを事務的に話し合うのは、うっとうしいことである。一日のばしにのばしているうちに、路子の胎内の子は大きくなっていった。

それでも建太郎は訪れてくるたびに路子を抱いた。路子は、それを暗黙の承諾だと思った。妻以外の女との間に子供をつくるのが困るのであれば、何かいうはずである。初めから何もいわなかったのは、生んでもいいということだったのだ。路子は、どんなことがあっても生み

ます、と切り口上^{こうじょう}でいわなくてよかった、と思った。そんなことをいっていたならば、

「何だ、まったくぼくの気持ちが変わっていかないのか」

と建太郎は怒ったかもしれないのだ。いや、きつと怒ったであろう。

そういう些^{ささい}細なことから口論になり、親密だった男女の仲にヒビが入ることは、大いにありうるのだ。自分の気持ち理解されていなかったことに、人は腹を立てるものである。

路子は間もなく勤めをやめ、半年後に、辰夫を出産した。その間の生活費やそのほかの費用は、建太郎が持ってきた。ただ、出産の前後一カ月、建太郎は、社用で南米へ出張した。

路子は、名前を建太郎につけてもらうつもりだったが、出生届けを出す関係上、建太郎の帰国を待つわけにはいかなかった。それに、建太郎が発する前に、路子は、男の子ならば辰夫、女の子ならば辰子とつけるつもりだと彼に話してあった。ちょうど辰年だったし、タツは建つに通ずる。

建太郎は、いいとも悪いともいわなかった。そして、帰国してからそれを聞いても、

「ほう、辰夫か」

といったきりだった。

路子は育児に専念し、建太郎が会社の帰りに寄るといふ生活が続いた。生活費は、定期的に、銀行の口座に振り込まれるようになった。ときには、このさきどういふことになるかという不安も湧かないわけではなかったが、建太郎を前にすると、それを口に出すことはできなかった。路子に比べれば、建太郎は二倍の年齢である。要するに、おとなである。こまかいことは気にせず、すべてを任^{まか}せておきなさい、というような態度を見せ続けているのだ。そうした問題を持ち出すのは、相手を信頼していないことにもなると思い、路子は黙っていた。辰夫は建太郎の実の子なのだ。決して不幸な目にあわせるようなことをするはずがない。

ただ、建太郎が辰夫の存在を家族に説明しているか否^{いな}かについては、路子には確かめようがなかった。家族というのは、父親の貫次や妻の房子^{ふさこ}のことである。この場

合、建太郎が房子に対して、辰夫や路子のことを打ち明けるとは考えられない。しかし、父親に対してだけは、

「じつは……」

と話してくれているのではないか。おそらく貫次からは、

「そうなる前に何とかならなかったのか。仕方のないやつだな」

くらいのことはいわれるだろうが、貫次にしても、裸一貫から叩き上げた苦勞人である。あるいは、意外ともわかりのよい態度をとっているのではあるまいか。そうでなければ、建太郎が路子のもとに通ってくることはできないように思われる。

それに、貫次はすでに八十歳に近いが、いまでも毎日きちんと朝の八時には出社しているという。建太郎の行動については、秘書から聞いていないはずがない。路子は、建太郎の会社に電話をかけたことはないが、建太郎のほうからはかけてくる。長い間には、自然に秘書にもわかるはずである。だから、もし貫次が建太郎の行為を認めないならば、

「手切れ金を払って別れろ」

とか何とかいうはずではないか。建太郎の態度にも何か変化が生じてくるだろう。

そういうことがないのは、房子には秘匿^{ひそ}していても（それは当然だろう）、貫次には打ち明けてあるとみている。物事はそう悪く考えるものではない。

路子はたえず自分にそのようにいい聞かせていたが、どうしても気がかりなのは、辰夫の戸籍の「父」の欄が空白になっていることだった。

建太郎にもいろいろと都合のあることは承知だが、やはり父親であることを法的に「認知」しておいてもらわねばならない。嫡出^{ちやくしゅつ}子ではないにしても、建太郎の實の子である事實は動かせない。

路子は、辰夫の誕生日にそれを切り出すつもりであった。彼の腕に辰夫を抱いておいてもらい、三人でローソクの炎を吹き消し、シャンペンで乾杯してから……。

路子は、国際建業本社の前に立つと、いつものようにサングラスをかけ、コートを脱いだ。時刻は正午すぎである。壮麗なビルからは、ほかの会社もふくめて多くのサラリーマンたちが食事をとりに出てくる時刻だった。

路子はかれらによく見えるように、背中を向けて立つ。白いブラウスの背面には、赤と黒のマジックインクを用いて、こう書かれている。

「卑劣な男、小野田建太郎を告発します。彼は愛人に生ませた子をわが子とは認めず、あまつさえ暴力団を用いて殺そうとしたのです」

ビルから吐き出されてくるサラリーマンたちのなかには、故意に目をそむけて通り過ぎるものもいるが、それは建太郎の会社のものである。ほかの会社のものは、すでに背中 of 文章を知っているものでも、やはり視線を向けるし、初めて見るものは、立ちどまって文章を読む。

初めてのとき、路子は、ブラウスではなくプラカードを用いた。そのときは、たちまちのうちに黒山のような人だかりとなった。路子は羞かしかった。覚悟を決めての行動だったとはいえ、人びとの視線から逃れて一目散

に逃げ出したかった。自分で自分の恥部をさらけ出すのだ。女としてこんなに羞かしいことはなかった。顔から火が出る、というが、まさしくそのとおりの気持ちだった。頭の中がぼろりと熱くなり、手足の感覚もなくなった。

そのときは、プラカードだったから、文章はもっと長かった。建太郎の卑劣さを具体的に書くこともできたし、若い女がどうしてもこのような行動に出なければならなかったかも知説明できた。

通行人たちの反応はさまざまだった。大別すると、路子の置かれた立場や、そうせざるをえなかった事情に同情するものと、だからといって、そのような行動に出なくてもいいのではないかと非難がましい^{つふや}呟きや嘲り^{あざけ}をもらすものである。どちらかといえば、後者が多かった。全体として、立ちどまって見物するのは、女よりも男のほうが多いせいかもしれない。なかには、

「やっばり、女っていうのはこわいなア」

「おい、お前も気をつけるよ」

などと聞こえよがしにいう男もいた。明らかに路子を

侮辱していた。

間もなく、ガードマンが近寄ってきて、立ち去るよう
にいった。ガードマンは、国際建業から、何とか処置す
るようにならされたに違いなかった。

もちろん、路子は動かなかった。死んでも動くものか、
と思いつめていた。

誰が知らせたのか、一時間もたったころ、週刊誌のカ
メラマンと取材記者がやってきた。カメラマンは続けざ
まにシャッターを切った。記者は、

「くわしい事情を聞きたいんですがね、この文面にある
小野田建太郎の愛人というのは、失礼ですが、あなたの
ことですか」

と質問した。

路子は沈黙を守った。それは、最初から心に決めてい
たことだった。新聞社や週刊誌に取材されることになる
かもしれない。そのさい、写真を撮られるのは仕方がな
い。だが、ペラペラ喋るつもりはなかった。建太郎の胸
に、裏切られた母子の無念の矢を射込むことができれば
それでいいのだ。

「どうして答えてくれないんです？ あなたの気持ちを
書いてあげようといっているんですよ」

と記者はいった。

路子はやはり答えなかった。

「おかしいな。どうして説明してくれないのかな」

と記者は苛立たしげにいった。

続いて別の週刊誌と新聞社が取材にきた。そしてかれ
らが同じように苛立っているとき、パトカーがやってき
た。

パトカーから下りてきた警官は、

「こういうことをしては困りますね。さ、早くお帰りな
さい」

といった。

路子は動かなかった。

「さアさア」

警官はなだめるようにいった。

ガードマンでは処理できないとみて、国際建業が警察
に頼んだのだ、と路子は思った。社内のどういう部門が、
こういう問題进行处理するのか知らないが、秘書課とか総

務課とか、いずれにしても担当者は蒼あおくなって警察に依頼したのだろう。ワンマン社長の御曹子の恥をこれ以上さらしておくわけにはいかない。何とかしなければ、自分のクビが危ないのだ。

だが、路子は動かなかった。

「困った人だねエ」

警官の口調が少し乱暴になった。路子はやはり黙っていた。

「こういうことをしては、いかんだよ。さア、いいかげんにして帰りなさい」

路子は、初めて口をひらいた。

「どうしてこういうことをしては、いけないんですか」

「それは……」

「わたしはビルの敷地に入っているわけじゃありません。道路に立っているだけですわ。国際建業はわたしを追い払いたいかもしれませんが、わたしはここに立っている権利があります」

「ただ立っているのは構わんが、こういう行為は交通妨害になる。道路交通法の違反になるんだ。それにこうし

てプラカードを掲げるのは、デモ行進と同じようなもので、都条例違反の疑いもある。悪いことはいわんから、早く帰るんだ」

と警官はおどしつけるようにいった。

「いやです」

と路子はきっぱりといった。つかまえる気ならおやりなさい、といたかった。

警官は困りはてていた。道交法や都条例に違反するとはいったものの、自信がもてないのか、いったんパトカーに戻った。そして無線電話で本署と連絡をとった。

間もなく、別のパトカーが到着し、乗っていた中年の婦人警官が路子に近寄ってきた。どうやら男の警官では手に負えないとみたらしい。

「どういふことなのか、わたしなら話してくださるわね」

とさすがに婦人警官はものやわからかにいった。

「わたしのしていることが何か法律にふれるのでしょうか」

「そういうことをふくめて、女性同士で話をしたいのよ。

ここでは無理だから、いっしょに本署まできてくださる？」

「もし、いやだといったら逮捕するんですか」

「逮捕だなんて、そんなふうに大げさなことじゃないわ。あなたの話を聞きたいからいっているのよ」

路子は、このへんが汐時^{しおとき}だろうと判断した。第一目なのだ。それなりの成果はあったとみていい。

「じゃ、行きます」

そういつて彼女はパトカーに乗りこんだ。ものわかりのよさそうな中年の婦人警官にも好感がもてた。

だが、それは甘かったのだ。本署に着いてみると婦人警官は引っ込んでしまい、代わって出てきた主任警部が路子をきびしく取り調べた。

きょうは初犯だから帰宅を許すが、プラカードを掲げてあのような行為をすることは、無許可デモと同じであるから二度としないように、というのである。

「じゃ、許可をいただければいいんですか」

と路子は聞いた。

「それは、ま、そうだが……」

「どちらに許可願いを出せばよろしいのでしょうか」

「都の公安委員会だ」

「どこにあるんです？」

「警視庁の中にあるが……あんたは本気でそんなことをする気なのか」

「無許可デモと同じだからいかん、とおっしゃったじゃありませんか。でしたら、許可をいただいた上でやりますわ。それに、わたしはデモ隊のように集団で示威行進をするわけではありませんし、いってみれば、サンドイッチマンと同じですわ。サンドイッチマンは、プラカードを持って町を歩くからといって、いちいち公安委員会の許可をとっているのでしょうか」

意地の悪そうな主任警部は、ぐっとなつまったが、

「あんたの場合はだな、内容的にみて、刑法の威力業務妨害罪になる恐れがある。サンドイッチマンと決して同じではないぞ。こっちは、あんたのためを思って、ああいうことはやめなさいと忠告しているんだ。屁理屈^{へりくつ}をいうなよ」

と怒ったようにいった。

路子は、屁理屈をいつているのは、相手ではないか、と思った。

事前に研究したわけではないので、自分の行為が何か法律にふれるかどうか、路子にはよくわからない。しかし、都条例違反だとか道路交通法違反だとか、さらには威力業務妨害罪になるとかいろいろいうが、要するに警察は国際建業に頼まれて、何とかして路子にああしたことをやめさせようとしているのだ。

警察は本来なら弱いものの味方ではなかったのか。プラカードを持って立ったことが、どれほど交通の妨害になったというのか。その内容は、ありのままを書いて建太郎の卑劣さを告発したものであるが、そのために国際建業の仕事が妨害されるというのか。

建太郎本人は、これまで匿^{かく}していたことを公けにされて恥をかいているかもしれない。だが、そのために専務取締役のポストを失うことはありえない。貫次から大いに叱られ、妻からはいじめられるだろうが、それは身から出た錆^{さび}というものである。そんな程度のことは、路子や辰夫の蒙^{こうむ}った疵^{きず}に比べれば、何ほどのことでもない。

警察にだって、そんなことはわかっていいるはずである。それなのに、路子の行為が大それた犯罪であるかのようになっているのである。

小野田貫次は、多額の政治献金を行ない、有力な政治家を握っているという評判だった。大臣クラスの代議士でさえ、電話一本で彼のところへ飛んでくるといわれているし、陣笠代議士のなかには、海外旅行に同行して貫次の鞆^{かばん}持ちをするものもいるという。

そういう小野田に、どぎつい表現を使うなら、警察はヘイコラしているのだ。弱者である路子を抑えつけようとしているのだ。

3

路子は二度目からは、プラカードだけは持たぬことにした。本当に法律に違反するのかどうかはわからなかったが、それを理由に逮捕されると、辰夫のためにも困るし、何よりも、一日の経験でわかったことだが、重くて腕が痛くなったのだ。

着ているものに書くぶんには、プラカードと同じだといえないはずである。そういう衣服はいけないとは、いかに警察でもいえない。また、それでサラリーマンたちが足をとめたからといって、道交法違反で逮捕することもできないだろう。

じじつ、二度目のときにも、パトカーはやってきた。しかし、プラカードを持っていない路子に対しては、何もいかなかった。困惑したように彼女のまわりをうろろろするだけだった。そして、三度目には、とうとうパトカーはこなかった。路子としては、むしろ拍子抜けを感じたくらいだった。

彼女は自分の闘争が長いものになるであろうことを覚悟していた。闘争の目標は、小野田建太郎という卑劣な男であるが、あえていうなら、それは建太郎個人との闘いではなかった。建太郎には、国際建業という大企業がひかえており、それは有力な政治家や警察までも味方になっているのだ。それを考えると、この闘いは容易なものではなかった。むしろ勝利の見込みは、ほとんどないかもしれないくらいである。

建太郎が手をついて謝罪し、辰夫を認知し、路子のうけた精神的苦痛に対する慰^{いしや}料と、辰夫が成人するまでの父親として当然負担すべき養育費を支払うこと。それが勝つということだが、それが望むべくもないことは、路子にもわかつている。

人びとの好奇の目を浴びて立っていると、ふと、
(こんなバカなことはおよし)

という理性の声が心の中でひびくこともあるのだが、路子は、交通事故でいま病院に入っている辰夫のことを考えると、家の中にじっとしていらなくなる。

(あれは本当に偶然の事故だったろうか。じじは、建太郎に金を貰^{もら}って頼まれた男が、乳母車をはねとばしたのではないか)

その男はまだつかまっていなかった。オートバイが乳母車をはねとばし、そのまま逃走した。見ていた人は何人かいたのだが、黒い色のオートバイというだけで、ナンバーを記憶したものはいなかった。路子自身、動転して乳母車から放り出された辰夫をしがみつくように抱きかかえた。それが精いっぱいナンパーは見えていなかった。

